一転出席 ぶれた民主

安保特別委可決

「野党共闘」演出を優先

15日に衆院平和安全法制特別委員会で可決された安全保障関連法案を巡っては、民主、維新、共産の野党3党が審議には出席したが、採決には参加しないことで足並みをそろえた。民主党は当初、審議も含めて欠席する方針だったが、党内の保守系議員から批判が出たり、共産党が出席する方針となったりしたことで、急きょ対応を変更した。

〈本文記事1面〉

▲ 党首会談に臨む民主党・岡田代表（中央）、維新の党・松野代表（右から２人目）ら野党党首（15日午後、国会で）＝中村光一撮影

「衆院本会議での採決で、野党席は『空っぽ』になる。野党が足並みをそろえて退席するのは、意義深い」

15日の民主、維新、共産など野党5党の党首会談後、民主党の岡田代表は記者団に対し、16日の衆院本会議での採決では野党5党が一致結束して共闘することをアピールした。

だが、民主党執行部は当初、維新、共産両党と共に特別委の理事会を含め、すべての審議を拒否するシナリオを描いていた。安住淳国会対策委員長代理は「野党が空席で強行採決されるのが歴史的な映像になる。そこに民主党がいてはいけない」と主張したという。

だが、14日夜、「15日の特別委の審議に共産党が出席する」との情報が寄せられ、民主党幹部の間に驚きが広がった。野党共闘を演出するためにも、民主党としても出席せざるを得ないとの判断に傾いた。

松本剛明・元外相や長島昭久・元防衛副大臣ら党内の保守系議員が、執行部の欠席戦術に異論を唱えたことも、戦術の見直しを後押ししたようだ。

民主党内には、維新の馬場伸幸国会対策委員長ら大阪系議員への不信感が根強い。16日の衆院本会議への対応を党首会談で決めた背景には、「維新の国対は信用できないため、党首同士で調整せざるを得なかった」（民主党幹部）との見方がある。大阪系議員は15日、菅官房長官から「頑張ったと聞いている」とねぎらいの電話を受けたという。

採決時、民主党議員は、委員長席に詰め寄り、プラカードを掲げて大声で反対を訴えた。テレビなどでも繰り返し取り上げられたことから、党幹部は「プラカードのおかげで、（反対している）いい絵も出せた」と満足げに語った。これに対し、維新は採決時、退席したほか、共産党はプラカードなどは掲げず、委員会室に残って抗議しており、民主党との違いが出た。

【自民】二階総務会長「重要な問題だから、政府、党を挙げて今後も理解を得られるようにいっそう努力することは大事だ。なにも強行して採決したわけではない。（委員会での採決に）意思表示として野党が出席しなかったというだけだ。円満な採決だと思っている」

【公明】井上幹事長「今後、参院でも十分な質疑が行われるので、平和安全法制の意義、重要性について国民の理解を得られるよう引き続き努力したい。民主党と共産党が賛否を明らかにしなかったのは残念だ。反対なら反対の理由を明らかにするのが議会政治の基本だ」

【民主】岡田代表「安全保障政策の大転換で、違憲の疑いが極めて濃い法案が強行採決されたことに強く抗議したい。首相自身が、国民の理解

荒れた採決 過去には……

PKO「牛歩」＊住専「ピケ」

安全保障関連法案のような与野党対決法案を巡っては、過去の国会では反対した野党が議事進行を物理的に妨害する戦術をとったケースもある。

1992年6月に成立した国連平和維持活動（PKO）協力法の参院本会議での採決では、反対する社会、共産両党が賛否の記名投票を、わざとのろのろ歩いて遅らせる「牛歩戦術」をとった。採決が終わるまで、「4泊5日」の徹夜国会となった。

96年の「住宅金融専門会社（住専）国会」では、96年度予算案から住専処理予算の削除などを求めた新進党が、衆院予算委員会室前に議員や秘書らを座り込ませるなどして封鎖する「ピケ戦術」を展開。約3週間にわたって委員会の開会を阻止した。民主党代表の岡田克也氏も当時、新進党議員として参加した。

こうした採決妨害には、野党が存在感を示す狙いがある。だが、国民の批判を浴びることも少なくない。PKO協力法成立直後の参院選や翌93年の衆院選で、社会党は大敗し、党勢衰退のきっかけとなった。